《大審問官》におけるキリスト像について

―― ドストエフスキーの「分身」のモチーフと石川淳の「見立て」――

泊　野　竜　一

1．《大審問官》と『焼跡のイエス』

ドフトエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の中の《大審問官》と、石川淳の『焼跡のイエス』の両者をここで持ち出すことは、唐突の感が否めないかもしれない。

じつはすでに竹山道雄が《大審問官》のものがたりの中でキリストと目される男（以下単に〈キリスト〉）と『焼跡のイエス』に登場する少年の顔に見るイエス＝キリストの比較の可能性を示唆している。竹山道雄は『焼跡の大審問官』という評論で、《大審問官》の中でイエスに対して大審問官が語る三つの誘惑を整理し解説している。竹山道雄は《大審問官》の最後で「暗い町の大通りに」消えたイエスが、大審問官と再び現代日本で相まみえたとするなら、大審問官が日本の状況をどのようにイエスに対して語るのか想像しつつ、文中で次のように書くのである。

> イエスがわれわれをも訪れ、この国の巷の民衆の間にも姿をあらわした――、このことには目撃者がある。戦後の名作と言われた「焼跡のイエス」という小説には、イエスが焼跡のきたない闇市のバラックの小屋にいた、と記してある。(1)

この竹山道雄の試みを参考にしつつ、本稿では《大審問官》と『焼跡のイエス』の両作品におけるイエス＝キリストを比較し、ドストエフスキーと石川淳が行ったイエス＝キリストの描写方法について考察を進めていくこととする。

2．《大審問官》に登場する〈キリスト〉

『カラマーゾフの兄弟』の中で、カラマーゾフ家の次男イワンが語る《大審問官》のものがたりは、大審問官の〈キリスト〉に対する尋問が中心である。この尋問で主人公の一方である大審問官は〈キリスト〉に対して長広舌をふるうのだが、〈キリスト〉は大審問官に対し一言も語らないのである。《大審問官》の語り手であるイワンは、《大審問官》のもう一人の主人公である〈キリスト〉を詳細に説明したり、その姿かたちを丹念に描写することもないのである。牢屋の中で大審問官と〈キリスト〉が二人きりであるという状況において、〈キリスト〉が大審問官

と比べて勝るとも劣らない重要登場人物であることについては言をまたない。それにもかかわらず、イワンはこれほどまでに〈キリスト〉に何も語らせず、その姿かたちを描写していないのである。

イワンが〈キリスト〉に何も語らせないという問題について、《大審問官》やドストエフスキーの長編小説の対話では、独特な表現方法が用られていると考えられる(2)。その表現方法とは、向かい合う人間の片方が一方的な長広舌を揮いもう一方がそれを聞いているのみという、一見すると単純なモノローグの形式をとっているが、本質的にはドストエフスキー特有の心的対話表現となっていると考えられるものをここでは指す。しかもその表現方法が用いられた対話では、むしろ通常の意味での対話よりも豊かな心的交流が実現されていると考えられるのである。つまり、イワンは敢えて〈キリスト〉が語らない大審問官との「対話」を描くことによって、大審問官と〈キリスト〉との間で通常の相互通行の対話よりもかえって多くの心的交流をもたらすことに成功しているのである。端的な例をあげると、はじめのうち、大審問官は〈キリスト〉を火刑に処するつもりであった。ところが大審問官は、《大審問官》の最後の場面で牢獄の扉をあけ放ち〈キリスト〉を釈放する。〈キリスト〉との「対話」ののちに大審問官の心境に大きな変化があったのは明白であると考えられる。もっとも、イワンは大審問官について以下のように語っている。

– Поцелуй горит на его сердце, но старик остается в прежней идее.(3)

「彼［大審問官、引用者］の心の中で接吻が燃えていたが，老人［大審問官、引用者］はもとの考えにとどまっていた。」

つまり、大審問官が完全に〈キリスト〉の考えに賛成したわけでもないのである。このように、お互いの心中に議論の余地をしているために、双方が別れたのちも双方の心中で対話が続くのである。このような対話を実践するため、イワンは敢えて〈キリスト〉に何も語らせなかったと考えられるのである。

本稿では、イワンが〈キリスト〉の姿かたちを描写しなかった問題に焦点を当ててみることとする。

イワンは〈キリスト〉のことを指す場合に、「イエス」や「キリスト」という単語を直接用いることはない。代名詞で呼び掛けるか、虜囚「пленник」（ДПСС 14. 227）という言葉を使うかのどちらかである。同様に大審問官もその対話の相手を代名詞で呼びかけるのみである。つまり、この〈キリスト〉は実のところたいへん不明瞭な人物なのである。

もっとも、このものがたりの中で〈キリスト〉の人物像に関しまったく何の手掛かりも残されていないわけではない。まず《大審問官》の語り手であるイワン自身が以下のように語っている。

Он появился тихо, незаметно, и вот все – странно это – узнают его. Это могло бы быть одним из лучших мест поэмы, то есть почему именно узнают его.（ДПСС 14. 226）

彼は静かに、人知れず現れる、そしてここで皆は、これはとても奇妙なことなのだが、彼が誰だかわかってしまう。これは僕の詩の最良の部分の一つとなりうるかもしれない。つまり、どうしてすぐに彼だと気付いてしまうのかという部分がね。

イワンや大審問官も、〈キリスト〉に呼び掛ける時は代名詞を用いているが、革命前に出版された『カラマーゾフの兄弟』のロシア語原文ではその代名詞の先頭が大文字となっている(4)。現代ロシア語の新約聖書においても代名詞がキリストをさす場合には、代名詞の先頭の文字を大文字とするのである(5)。このように《大審問官》の〈キリスト〉は、あたかも新約聖書のキリストと同一であることを示唆するかのように描かれている。

そして〈キリスト〉は大審問官に逮捕される前に、大衆の眼の前で死んだ少女を生き返らせるという奇跡をおこなっている。しかもその際に「Талифа куми（タリタ・クミ――少女よ、起き上がれ）」（ДПСС 14. 227）と言っている。つまり、キリストと同じ発言と奇跡を行っているのである。以上のことから《大審問官》に登場する〈キリスト〉は、新約聖書のキリストとほぼ同一視できるとも思われる。

しかし《大審問官》の中での〈キリスト〉は、イワン自らが述べたところによると次のように現れる。

О, это, конечно, было не то сошествие, в котором явится он, по обещанию своему, в конце времен во всей славе небесной и которое будет внезапно, «как молния, блистающая от востока до запада».（ДПСС 14. 226）

ああ、これはもちろん、自分で約束したような、この世の終わりに天の栄光に包まれて現れるものでなく、「稲妻が、東から西へきらめく」ような不意の訪れではない。

新約聖書においては、キリストがこの世に再臨するのは、最後の審判の行われる世界の終わりの日であると書かれている。そしてその時のキリスト像の姿は次のように記されているのである。

ἐν τῇ ἀποκαλύψει τοῦ κυρίου Ἰησοῦ ἀπ᾽ οὐρανοῦ μετ᾽ ἀγγέλων δυνάμεως αὐτοῦ ἐν πυρὶ φλογός,（2 Thess. 1:7-8）(6)

主イエスが天から再臨なさる時、その力強い天使たちとともに火炎の中にいる。

このイエス＝キリストはイワンの描く〈キリスト〉と全く異なるイメージをもっている。

また新約聖書のキリストは神の言葉を地上にもたらし、それを実践するために地上にやって来たため、結果として極めて饒舌な人物である。キリストは逮捕された後の最高法院での審問でもピラトからの尋問の際でも、四福音書を通じて、釈明すべき部分でははっきりと返答している。これに対して《大審問官》のものがたりに登場する〈キリスト〉は終始沈黙を守り続けている。つまり、この〈キリスト〉は多くの面において新約聖書のキリストとはかなり異なる人物として表現されているのである。はたしてこの〈キリスト〉は一体何者なのであろうか(7)。

このような《大審問官》に登場する〈キリスト〉像について注目し、それに対して分析を加えている主要な研究としては以下のものがある。

まず、神学者のガルディーニは『ドストエーフスキイ――五大ロマンをめぐって――』(8)の中で、《大審問官》に登場する〈キリスト〉は新約聖書のキリストとは別な形象ではないかとの意見を述べている。その理由としてガルディーニはこの〈キリスト〉は受肉したロゴスとは思えず、天の父から遣わされたものでなく、また父の元に帰っていくものでもない、などの点を挙げている。

R. ミュラーはドストエフスキー作品におけるキリスト像の考察(9)や、《大審問官》に関する研究(10)をおこなっているが、そのミュラーの後を受け、V. カザークは大審問官と〈キリスト〉との対話を、大審問官と大審問官自身の良心との対決であると書いている。続けてカザークは、新約聖書に書かれたキリストに対して人が何事かを付け加えることはできない。もし何か付け加えたとすれば、救世主としてのキリストとは別の姿となってしまう。これが、《大審問官》の中の〈キリスト〉が何も語らず、その描写は最小限なものとなっている理由なのだと述べている。さらに本稿にとって重要であるのは、カザークがドストエフスキーの描く大審問官の見た〈キリスト〉は、聖書のキリストではなく文学的なイメージなのであると述べている点である(11)。

P.E. フォーキンは、《大審問官》の中でイワンが救世主のキリストのイメージを語らない理由について以下のように主張している。無神論者であるイワンにとって否定するべき相手としての神のイメージ（Образ Божий）は必要である。ところが徹底した無神論者のイワンは、キリストの横顔（Лик Спасателя）を想像することも描くこともできないのである(12)。

これらの研究を概観すると、《大審問官》の〈キリスト〉は、新約聖書に登場するキリストとは別のものではないかという見解が浮かび上がってくる。しかし、キリスト教が文化的・思想的に根付いているロシア・西欧の研究者による分析は、あくまで宗教的・倫理的な視座から『カラマーゾフの兄弟』におけるキリスト像を解釈し、それに対するアプローチを行うにとどまってい

るのみであるという憾みがある。以上の研究者たちの中では、カザークのみが文学的な視点からのキリスト像を指摘しているにとどまっている。

3.『焼跡のイエス』に登場するイエス＝キリスト

石川淳『焼跡のイエス』は、語り手の「わたし」が訪れた上野の闇市で、突如出現した戦災孤児と思しき少年にイエスのイメージを見る話である。

「わたし」は煙草をヤミで買うために、あすには閉鎖されるとの噂の立つ上野の闇市を訪れる。首尾よくたばこを手に入れた「わたし」はさっそく一服しようとするが、そこへボロをまとい全身が膿や垢、疥癬などで覆われた少年が突如現れる。そのあまりにひどいなりは海千山千の闇市の見回り役の男や売人たちでさえたじろぐほどのものだった。その少年は、飄々と闇市を歩きまわっていたが、ムスビ屋に飛び込むと札を台の上に置き、ものも言わずに蠅のたかったムスビをわしづかみにして食べてしまう。店の売り番の若い女が驚いて叫び声をあげ立ちあがろうとすると、なんと少年はその肉感的な女の素足にしがみついた。もみ合う二人は、一部始終を覗いていた「わたし」のほうに倒れこんだ。「わたし」はとっさに若い女の体をささえようとするが、あえなく吹き飛ばされてしまう。「わたし」がやっと起き上がると、少年の姿は消えていた。かわりに、いっぱいの人だかりの中、シュミーズに「わたし」が吸っていたたばこで焦げ跡をつけられた店番の女が「わたし」をにらんでおり、その女の後ろには竹の棒をうならせる見回り役の男が控えていた。「わたし」は野次馬の一人を突き飛ばし闇市から一目散に逃げ出した。無事に電車通りまでたどり着き、ほっと一息ついたところで、「わたし」は先ほどの少年のことを思い出すのである。

> 少年がクリストであるかどうか判明しないが、イエスだといふことはまづうごかない目星だらう。市場のものどもはいつたいにあまりにおしやべりをしないやうだが、少年はとくに一言も口をきかなかつた。按ずるに、行為がことばだといふわけだらう。(13)(14)

さて、実はその日「わたし」は、服部南廓の撰による太宰春台の墓碑銘を拓本にとるために上野までやってきたのである。「わたし」は、太宰春台の墓のある寺に行こうと上野の山へむかう。ところが、先ほど闇市で遭遇したあの少年が送り狼のごとくぴたりと自分のあとをつけ、じりじりと間合をつめていていることに気が付く。

こらえきれなくなり、振り向いた「わたし」に少年がとびかかってきた。「わたし」は少年を組み伏せることに成功したが、自分の下にある相手の顔が目に入った際に「わたし」は恍惚となるまで戦慄する。

わたしがまのあたりに見たものは、少年の顔でもなく、狼の顔でもなく、ただの人間の顔でもない。それはいたましくもヴェロニックに写り出たところの、苦患にみちたナザレのイエスの、生きた顔にほかならなかつた。わたしは少年がやはりイエスであつて、そしてまたクリストであつたことを痛烈にさとつた。（石川２：480）

少年は「わたし」の一瞬のすきをついて「わたし」を突き倒し、「わたし」が持参していた昼飯用のパンと財布を盗むと、拓本用の紙を「わたし」に投げつけ、その場を立ち去った――

あくる日、またあのイエスに会いたいと思った「わたし」は上野の市場を訪れるが、あてにならないはずの官のお触れが今度ばかりは徹底されたらしく、闇市は忽然と姿を消していた。

ここで石川淳の描写した「焼跡のイエス」に登場する、イエス＝キリストに見立てられた戦災孤児の少年（以下単にイエス＝キリスト）について詳しく検討してみよう。まず、語り手である「わたし」は長広舌こそ振るわないものの、その心中は本文中にきちんと描写されている。それに対して次に示すように、作品中でこのイエス＝キリストのセリフは文字通り全く存在しない。

市場のものどもはいつたいにあまりおしやべりをしないやうだが、少年はとくに一言も口をきかなかつた。（石川２：476）

小説の中で「わたし」はイエス＝キリストに話しかけず、イエス＝キリストも一言も発しない。二人の間で全く言葉が交わされないという点では、やはりこの二人の間の交感は通常の意味での対話とは異なった形で進行しているといえる。

ところが、先にも述べたように新約聖書のキリストは、神の教えを地上に広めるために受肉したロゴスであり、非常に饒舌な人物である。新約聖書のキリストとこの作品のイエス＝キリストとを比較して考える際、このイエス＝キリストが寡黙であるという点は奇妙に思われる。

主人公の「わたし」はイエス＝キリストと会う前は禁制品の煙草を手に入れるためにわざわざ闇市にまで出没し、闇市の売手の女に鼻の下をのばしていた人物である。さらに闇市で一服した後は、戦後の混乱と食糧難のさなか太宰春台の墓碑銘を拓本に取って帰ろうという、なんとも浮世離れしている人物であった。ところが、イエス＝キリストと出会った次の日、また上野の市場にやってきた時の「わたし」には以下に引用するような心境の変化が表れているのである。

あくる日、朝のうちに、わたしはまた上野の市場まで出て来た。きのふの格闘であぶら汗をながしつくしたせゐか、わたしもすこしは料簡が小ざつぱりとして、けふは谷中の墓石のことはかんがへなかつた。（石川２：481）

このように、「わたし」はイエス＝キリストと出会う前と異なった心境になっているのである。両者の間では、通常の相互通行の対話とは違う、ある種の心的交流が行われたことが伺われる。ただし、「わたし」は次のようにも語っている。

そして、ついでに、やはりもう一度ぐらゐは、あのムスビ屋の女の足を行きずりに見物してもよいといふふとどきな料簡はまだあつた。（石川２：481）

つまり、「わたし」とイエス＝キリストとの全くの無言のやり取りの中で「わたし」が完全にイエス＝キリストによって感化されたわけでもないのである。

ところが、このイエス＝キリストの姿かたちについては作中に豊富な描写が存在する。その一例を以下に引用する。

道ばたに捨てられたボロの土まみれに腐つたのが、ふつとなにかの精に魅入られて、すつくり立ち上つたけいきで、風にあふられながら、おのづとあるく人間のかたちの、ただ見る、溝泥の色どすぐろく、垂れさがつたボロと肌とのけじめがなく、肌のうへにはさらに芥と垢とが鱗形の隈をとり、あたまから顔にかけてはえたいの知れぬデキモノにおほはれ、そのウミの流れたのが烈日に乾きかたまつて、つんと目鼻を突き刺すまでの悪臭を放つてゐて、（石川２：470）

この姿は、「わたし」が戦災孤児であると思しき少年の顔にイエス＝キリストを見た時でも変わりはない。この描写が新約聖書のキリストの姿と同様であるとは言い難いのは、多言を要するまでもないだろう。『焼跡のイエス』のイエス＝キリストは再臨のキリストと似ても似つかぬばかりでなく、むしろ全身がデキモノでおおわれているイエス＝キリストのいでたちは新約聖書のキリストというよりルカによる福音書に登場するラザロのものである。

以上のように石川淳の『焼跡のイエス』におけるイエス＝キリストの描写を細かく取り上げてみると、この小説に登場するイエス＝キリストを新約聖書のキリストと同一視しがたい数々の留保が浮かび上がるのである。

４．《大審問官》の「取り違い」と『焼跡のイエス』の「見立て」

ここでドストエフスキーの《大審問官》に登場する〈キリスト〉を考えるうえで、極めて重要な暗示となる場面を思い出しておきたい。《大審問官》の序盤で、最後の審判を待たずに再び地上に現れたらしい〈キリスト〉を大審問官が逮捕する。アリョーシャはイワンから《大審問官》のものがたりを聞いている途中、思わず兄の話をさえぎって次のようにいう。

– Я не совсем понимаю, Иван, что это такое? – улыбнулся всё время молча слушавший Алеша, – прямо ли безбрежная фантазия или какая-нибудь ошибка старика, какое-нибудь невозможное qui pro quo?

– Прими хоть последнее, – рассмеялся Иван, – если уж тебя так разбаловал современный реализм и ты не можешь вынести ничего фантастического – хочешь qui pro quo, то пусть так и будет.（ДПСС 14. 228）

「イワン兄さん、僕はさっぱりわかりません、これは一体何なのですか？」ずっと黙って聞いていたアリョーシャはにっこり笑った。「単に際限のない空想なのかそれとも大審問官の何かの勘違いか、何かありえないような〈取り違い〉ですか？」

「あとの方だと思ってもいいんだぜ。」イワンは笑った。「もしお前が現代のリアリズムにひどく甘やかされていて、幻想的なことはなんでも我慢できないというならば。お前が〈取り違い〉と思いたいのなら、そうしよう。」

ここで、アリョーシャは、大審問官が見た〈キリスト〉のことを空想かそれとも人違いかと考えている。そして注目すべき点は、《大審問官》の語り手であるイワン自身もアリョーシャの意見を半ば了承しているのである。そしてこのアリョーシャの問いの直後、イワンは次のように言う。

Это мог быть, наконец, просто бред, видение девяностолетнего старика пред смертью, да еще разгоряченного вчерашним автодафе во сто сожженных еретиков.（ДПСС 14. 228）

結局のところこれはたんなる譫妄かもしれない、死を前にした九十歳の老人の幻想かもしれない、百人の異教徒を焼き殺した夕方の火刑でまだ気が立っているのかもしれない。

つまりこの部分でアリョーシャやイワンが語っているように、大審問官は新約聖書のキリストを見たわけではなく、単に人違いの人物にキリストの幻想を見ている可能性もある。また、イワンは、老人が譫妄症を患っていることさえほのめかしている。以上のアリョーシャとイワンの二人のやり取りからは、大審問官が大衆の面前で逮捕して牢屋に閉じ込め一対一で尋問を行った人物が、実はキリストと〈取り違え〉られた全く関係のない他人である可能性も指摘できるのである。では、大審問官がキリストの幻影を見ているとするならば、それは一体どの場面から始まっているのであろうか。それはやはり先述のイワンの言葉がヒントになるであろう。老人が幻影に嘖まれるようになったのは、百人の異教徒を焼き殺し、気が立ってしまった夕刻からであると考

えられる。

次に石川淳が自身で「見立て」と呼んでいる文学技法に着目したい。「見立て」は石川淳が江戸文学から得た一種のメタファーであり、その着想のもととなったのが謡曲『江口』である。

二人の諸国一見の旅僧が、西行法師と歌のやり取りをしたこともある遊女の江口の君の旧跡を訪ねる。二人の僧が江口の君を弔う読経を始めると、江口の君が幽霊となり川面にかつての舟遊びを楽しむ姿が旅僧たちの前に現れる。やがて船は白象の姿となり、遊女だった江口の君は普賢菩薩の姿となって飛び去っていった――(15)

船を白象の姿とし、江口の君を普賢菩薩と化して飛び去らせた謡曲中の手法を石川淳は「見立て」と呼んでいるのである。

石川淳が『焼跡のイエス』の中でもちいた「見立て」に関して、野口武彦氏は「聖書伝説のイメージを戦後風俗に重ね合わせる技法」(16)であると述べている。また山口俊雄氏はこの「見立て」の手法により、戦災孤児がイエス＝キリストに変容させられていくさまを詳細に分析している(17)。『焼跡のイエス』も、実際のところは単なる戦災孤児にすぎないであろう少年に、登場人物である「わたし」がその心象風景に映るイエス＝キリストの姿を見る小説であると言えるのである。

このように考えると、《大審問官》における大審問官と〈キリスト〉の出会いも、『焼跡のイエス』で「わたし」が少年の顔にイエス＝キリストの顔を見るという「見立て」も、どちらも小説の主人公が、キリストと本来全く関係のない人物にキリストを見ているのだと言うことができる。つまり、ドストエフスキーも石川淳も、その作品中で文学上の技法としてはある意味で同質な操作を行っているのである。

5．大審問官と「わたし」の見たもの

もう一度《大審問官》の〈キリスト〉とは誰かという問題に戻ることとする。最初に触れたように《大審問官》のキリスト像に関する先行研究では、キリスト教的な立場をとる研究者からの分析でも〈キリスト〉は少なくとも新約聖書のキリストとは異なる人物であるとの一連の意見があった。では〈キリスト〉が新約聖書のキリストと異なる人物であるとするならば、結局のところ《大審問官》の〈キリスト〉とは具体的にはどのような人物なのであろうか。

それを探る一つの手がかりとなるのが、《大審問官》の語り手であるイワンのひととなりである。イワンは罪のない子供の涙に悲しむ一方で、その虐待された子供たちの新聞記事を密かにコレクションするという嗜虐的な傾向も持ち合わせている。このようにイワンという人物にはすでに人格的な亀裂ができており、それが悪魔と自己との分裂の胚胎となっているということは、山城むつみ氏の指摘しているところである(18)。

さらにイワンは《大審問官》をアリョーシャに語り終えた後、スメルジャコフからフョードル

の殺害者がほかならぬスメルジャコフ自身であるとの告白を聞かされる。イワンはドミートリーの裁判へ出席し、ドミートリーの潔白を証明することを決意する。ところがそのイワンの前に自分の分身であることが明らかである悪魔が登場し、イワンはその悪魔と対話するのである。スメルジャコフの自殺を伝えるべくアリョーシャがイワンの家を訪れたときに、悪魔はイワンの目の前から忽然と姿を消す。イワンは無理を押してドミートリーの裁判へ出廷し証言を開始するが、しばらくのちにイワンは譫妄症を発症してしまう。

譫妄症を発症し自己の分身である悪魔の幻想を見てしまうことになるイワンが創作した物語が《大審問官》である。さらに、「Это мог быть, наконец, просто бред, видение девяностолетнего старика пред смертью, 結局のところこれはたんなる譫妄かもしれない、死を前にした九十歳の老人の幻想かもしれない（ДПСС 14. 228）」というイワンの説明が示す通り、《大審問官》の登場人物である大審問官は、ものがたりの語り手であるイワンと同じく譫妄症にかかっているかもしれないのである。

以上のことから大審問官は、自らの分身としての〈キリスト〉を眼前に作り出したと考えることは可能であろう。百人の異教徒を焼き殺したことで熱に浮かされた老人は、誰にも語らないまま九十年間内に秘めていた自らの意見を一気に吐き出す相手として、自分の分身である〈キリスト〉の幻影を自らの前に作り出したというわけである。

さらにここで想起しておきたいのは、ドストエフスキーはその作家活動の最初期、出版された作品としては二番目のものである『二重人格』を発表していることである。この作品の筋書きは、旧ゴリャートキン氏の分身である新ゴリャートキン氏が登場し、分身である新ゴリャートキン氏がもともと本体であったはずの旧ゴリャートキン氏を圧倒してしまうというものである。つまり、ドストエフスキーは『カラマーゾフの兄弟』を創作する以前から「分身」という技法に関心を抱いていたのである。

就中、留意しておきたいのは、《大審問官》における分身は、ホフマンの『悪魔の霊液』、ポゴレーリスキイの『分身―あるいはわが小ロシアの夕べ』、ポーの『ウィリアム・ウィルソン』、あるいは『二重人格』などよく知られた分身小説に登場する分身のように、分身が本体と鏡で写したように瓜二つというタイプのものとは異なるということである。大審問官と〈キリスト〉とは、その姿かたちは全く異なるものと考えられ、言動に至ってはまったくの別人と考えてさしつかえない。のちにイワンが見た自己の分身である悪魔も、少なくとも外見上はイワンとの類似点が見られない。

さらにもう一度『焼跡のイエス』に目を向けると、この小説でも、何の変哲もないただの戦災孤児と思しき少年に対して、おそらくその少年とは全く似ても似つかぬであろうイエスの姿が「見立て」られている。永淵道彦氏は、イエスに見立てられる「少年」像そのものにも関心を向け、以下のような指摘を行っている。この小説では、ぼろをまとったできものだらけの少年た

ちについて、海千山千であるはずの闇市の住人たちが何のゆえか「怯え」を感じてしまう。それは、未曾有の戦争で社会が荒廃し、本来何の責任もないはずの多くの少年たちが敗戦の結果を背負わされてしまった。闇市の住人たちは、大人であるがゆえ、大戦後の日本にもたらされた結果に対し責任が皆無とは言えない。そのため、何の責任もなく現在の状況に追い込まれた戦災孤児に対し「怯え」を感じるのである。主人公の「わたし」は、戦後の混乱のさなか、太宰春台の墓碑銘を拓本にとりに上野まで出かけていくという浮世離れした行動を取ることのできる人物であるが、闇市の住人達と同様の大人であることにかわりはない。そんな「わたし」にとってぼろをまといできものだらけの「少年」は、闇市でその飄々とした風貌と狂暴なまでの生命力で「わたし」の注目を集める存在となっていた。ところが、「わたし」が「少年」に興味を失ってしまうと、その「少年」は急速に魅力を失い、ただの戦災孤児となり果ててしまった。つまり、永淵道彦氏は、焼け跡を闊歩していた「少年」が現実にその場にいた少年と異なる「わたし」の心象風景である、と述べているのである(19)。

氏の考えに準拠して考察を行えば、そういった「わたし」は闇市の住人たちと同様、あるいはそれ以上にある種の引け目を少年に対し感じてしまう人物である。そのためぼろをまとった戦災孤児に対して恐れを抱くばかりか、イエスの姿を「見立て」てしまったといえよう。つまり、戦災孤児に映し出されたイエスの姿は、「わたし」自身の感情の一部である負い目から生み出された、「わたし」の心象風景なのである。

全く同様に、大審問官にも実のところそのほとんどが無辜の人々であったと考えられる「異端者」を火刑に処し続けてきたことについての迷いが常にまとわりついていたのであろう。また、キリストは再び地上を訪れると約束したが、《大審問官》の中の世界ではそれから実に十五世紀もの時間が経過しており、大審問官にはキリストとそのことばなくして教会を支えていかなければならなかったことに対する不安の気持ちがあったのだろう。それが、自分の分身としてのキリスト像を「取り違え」てでも自らの前に出現させてしまった原因であろうと考えられる。『焼跡のイエス』の「わたし」が少年にイエス＝キリストの姿を見たのと同様の構図である。イワンが《大審問官》をアリョーシャに語り終えた後に、自分の分身である悪魔の姿を見てしまった時にもこの構図を当てはめることができる。イワンは、「神と不死がなければ、全てが許される」と豪語し、自分のエピゴーネンたるスメルジャコフを使嗾し、父親殺しを実行してしまった。そのことに対する自身の後悔や良心の疼きが、イワンの眼前に自身の分身を悪魔の形で召喚してしまったのだろう。

つまり、大審問官とイワンの二人は、あたかも真実の鏡の前に立ったかのように、自分がひそかにそうであろうと想像していた姿であるキリストと悪魔の姿を見てしまったのである。これが、ホフマンやポーそして自身の作品である『分身』に登場する瓜二つの分身と異なり、ドストエフスキーが『カラマーゾフの兄弟』の中で駆使した分身の姿かたちが本体と異なる理由であ

る。とはいえ、〈キリスト〉も悪魔も結局は本体であるところの大審問官やイワンの思考や感情の一部から作り出されたものという点で、本体から分離したという意味での分身ととらえることが可能であると言ってよい。

以上を考慮すると日本文学の石川淳による、日本の戦災孤児とイエス＝キリストという、時代も場所も異なる者同士を重ね合わせる「見立て」という現象は、ロシア文学のドストエフスキー作品においては、文学上の「分身」という技法として表現されているものであるといえる。

6．むすび

《大審問官》は、実のところ新約聖書に登場するキリストとは異なる点の多い人物である〈キリスト〉が登場する作品である。そして《大審問官》と同様、石川淳の『焼跡のイエス』にも新約聖書に登場するキリストとは異なる点の多い戦災孤児がイエス＝キリストとして登場する。キリストの登場という共通する主題を持つこの《大審問官》と『焼跡のイエス』とを比較すると、両作品はその登場人物の前に自分の心象風景を登場させるという文学的手法を用いていることがわかる。それは石川淳においては、終戦直後どこにでもいた戦災浮浪孤児の一人にイエスの姿を見ると言う「見立て」という技法で表現されている。そしてドストエフスキーにおいては、大審問官の眼の前に、大審問官自身の分身を登場させるという技法に結実しているという読みの可能性を本稿では指摘した。

しかし、この結論からはさらに次のような問いが導き出される。それは、ドストエフスキーがなぜ『カラマーゾフの兄弟』中の《大審問官》で、「分身」という技法を使用したかという問いである。「分身」という技法は、それまで少ない登場人物でモノローグ的な会話の続く中編小説中でもちいられてきたものである。一方、ドストエフスキーの後期長編小説では、多くの登場人物が多くの対話を生み出し物語が展開していくのである。その中で、登場人物の分身を文学上の対話表現としてわざわざもう一度持ち出してくることの意義は何なのであろうか。また大審問官と〈キリスト〉、そしてイワンと悪魔の両者はともに同じ分身ではあっても明瞭な違いがある。前者の分身はあくまで沈黙を守るが、後者は分身と本体とが盛んに会話を繰り広げるのである。

本稿では説明しきれなかったこれらの問題については今後また執筆の機会を得て述べることとしたい。

注

（1） 竹山道雄『憑かれた人々』新潮社、1949年、29頁。

（2） 泊野竜一「《大審問官》における「長広舌と沈黙との対話」」2013年度早稲田大学大学院文学研究科修士論文。

（3） *Достоевский Ф.М.* Полное собрание сочинений в тридцати томах: В 30 т. T. 14. / АН СССР. ИРЛИ. Л.: Наука, 1976. С. 239. これ以降ドストエフスキーのテキストは、ДПСС 14. 239のように表記し、本文中に示す。訳は拙訳による。

（4）《大審問官》に登場するキリストと目される人物は、アカデミー版三十巻本全集では単に代名詞で示されているのみである。しかしロシア革命以前の版では、神やイエスを示す名詞・代名詞はその頭文字が大文字で表記されている。旧ソ連崩壊後、近年発行されつつあるドストエフスキー全集の中では、例えば『罪と罰』の中のマルメラードフのセリフ、а пожалѣетъ насъ Тотъ Кто всѣхъ пожалѣлъ, и Кто всѣхъ и вся понималъ, Онъ Единый, Онъ и Судія.（*Достоевский Ф.М*. Полное собрание сочинений: Кононические тексты Т. 7. / под. ред. проф. В.Н. Захарова. Петрозаводск: ПетрГУ, 2007. С. 27.）などのように、神に関する単語の先頭の文字を大文字とした版も存在する。また、本稿で引用した2007年に発表されたP.E. フォーキンの論文でも神や神に関連する単語はその先頭が大文字となっている。

（5） Библия: Книги священного писания Ветхого и Нового завета. М.: Российское библейское общество, 2007.

（6） *Novum Testamentum Graece*, 27th ed. (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1993), 538-539.

（7） 但し、アリョーシャはこの人物がイエスであるとの印象を受けている。「Поэма твоя есть хвала Иисусу, а не хула… как ты хотел того.（ДПСС 14. 237）あなたの劇詩はイエスの賛美であって、悪罵ではありません…兄さんがそう望んだのです。」

（8） ロマーノ・グァルディーニ（永野藤夫訳）『ドストエーフスキイ――五大ロマンをめぐって――』創文社、1958年、131-139頁。

（9） Ludolf Müller, "Die Gestalt Christi im Leben und Werk Dostojewskijs," *Quatember* 45（1981）: 68-76. Ludolf Müller, "Die Gestalt Christi im Leben und Werk Dostojewskijs," *Quatember* 45, Jahrgang Heft 2 /（April – Juni 1981）: 68-76.

（10） Ludolf Müller, *Dostojewskij: sein Leben – sein Werk – sein Vermächtnis*（München: Erich Wewel Verlag, 1990）, 91-103.

（11） *Казак В*. Образ Христа в «Великом инквизиторе» Достоевского // Достоевский и мировая культура Альманах №5. 1995. С. 37-54.

（12） *Фокин П.Е*. Поэма Ивана Карамазова "Великий инквизитор" в идейной структуре романа Ф.М. Достоевского "Братья Карамазовы" // Роман Ф.М. Достоевского «Братья Карамазовы»: Современное состояние изучения / Под ред. Т.А. Касаткина; РАН. ИМЛИ. М.: Наука, 2007. С. 115-136.

（13） ここで語り手である「わたし」は、少年がキリストであるかどうかは分からないものの、イエスであることは間違いないと考えている。通常一般的なキリスト教的意味では、キリストとは、古典ギリシャ語で油を塗られたもの（古代イスラエルで王）という意味で、天の国の父なる神から地上へつかわされた全人類の救世主という意味である。イエスとは、大工のヨセフとマリアの間に生まれた息子に付けられた名前である。

（14） 石川淳『石川淳全集　第２巻』筑摩書房、1989年、475-476頁。これ以降石川淳のテキストは、石川2：475-476 のように表記し、本文中に示す。

（15）『新装愛蔵版　解註 謡曲全集　巻二』中央公論社、1984年、259-272頁。

（16）『日本近代文学大事典　第一巻』講談社、1977年、94-97頁。

（17） 山口俊雄『石川淳作品研究―「佳人」から「焼跡のイエス」まで』双文社出版、2005年、360-381頁。

（18） 山城むつみ『ドストエフスキー』講談社、2010年、452頁。

（19） 永淵道彦『焼跡の「少年」とは何者か――石川　淳「焼跡のイエス論」――』「筑紫女学園短期大学紀要」40号、2005年、1-11頁。